

Karl Marx Friedrich Engels
DAS KOMMUNISTISCHE MANIFEST
1848

凡例

「」の邦訳『共産党宣言』は、マルクス・エンゲルス・レーニン研究所V・アドリフキーの編纂する『マルクス・エンゲルス全集』を原本としてなされた。(Karl Marx-Friedrich Engels: Historisch-Kritische Gesamt-Ausgabe. Im Auftrage des Marx-Engels-Lenin-Instituts Moskau herausgegeben von V. Adoratskij. Erste Abteilung Band 6. Marx-Engels-Verlag Berlin 1932.)

「」の全集版は、『共産党宣言』一八四八年版「三〇ページ本」(第一版)を底本とし、一八四八年版「三三三ページ本」(初版)、一八七一年版、一八八三年版、一八九〇年版との相違について、詳細な校註をほどこしてゐる。本訳書は、だいたいにおいて、この全集版の方針にしたがい、一八四八年版「三〇ページ本」を底本とし、全集版の校註から主なものをとつて巻末につけた。ただし場合によつては、一八七二年版以後の訂正を本文に採用した個所もある。

「」、ドイツ語版および英語版につけられたエンゲルスの原註は、本文中に挿入した。また若干の訳者註も本文中に挿入されている。これらは註番号(1)(1)で示し、本

文中の*は校註のある個所を示す。

四、巻末の「英語版との対照」は、全集版の後註によつたものであるが、訳者の附け加えたものも若干ある。

五、マルクス・エンゲルスの「ソマジ語版への序文」は、モスクワ版『共産宣言』にみられた。(K. Marx-F. Engels: Manifest der Kommunistischen Partei. Verlag für Fremdsprachige Literatur Moskau 1939.) 「英語版への序文」は Manifest of the Communist Party, By Karl Marx and Frederick Engels. Authorized English Translation, edited and annotated by Frederick Engels. Chicago, Charles H. Kerr & Company. が用ひた。「英語版との对照」に用ひたのまいの版である。

目 次

ドイツ語版への序文

一八七一年(マルクス・エンゲルス).....

一八八三年(エンゲルス).....

一八九〇年(エンゲルス).....

|一八八二年ロシア語版への序文(マルクス・エンゲルス)を含む――

英語版への序文(一八八八年 エンゲルス).....

ボーランド語版への序文(一八九二年 エンゲルス).....

イタリーグ版への序文(一八九三年 エンゲルス).....

共 産 党 宣 言

第一章 ブルジョアとプロレタリア.....

第二章 プロレタリアと共産主義者.....

一八七二年ドイツ語版への序文

国際的な労働者の結合である「共産主義者同盟」は、当時の事情のもとではいうまでもなく秘密な結合でしかありえなかつたが、一八四七年十一月ロンドンでひらかれた大会で、下記署名人らに、公表の目的で、理論的で実践的な、くわしい党綱領を作成することを委任した。この『宣言』はこうしてできあがつたのであるが、その原稿が印刷のためにロンドンへ送られたのは、二月革命の数週間まえであつた。最初ドイツ語で発行され、この国語でドイツ、イギリス、およびアメリカで少くとも十二種類の版が発行された。英語では、一八五〇年、ロンドンの『赤色共和主義者』(Red Republican)に、ヘレン・マクフアーレン娘の翻訳であらわれたのが最初で、一八七一年にはアメリカに少くとも三種類の翻訳がおこなわれている。フランス語では、一八四八年の六月叛乱の直前にパリで出たのが最初であり、最近ではニューヨークの『社会主義者』(Le Socialiste)に掲載された。もう一つあたらしい翻訳が準備されている。ポーランド語では、最初のドイツ語版のすぐあと、ロンドンで出版され、ロシア語ではジュネーヴで六〇年代に出版された。同様に最初の出版ののちまもなくデンマーク語にも翻訳された。

最近二十五年間に事情はおおいに変化したが、それでもこの『宣言』のなかにのべられている一般的諸原則は、だいたいにおいて、今日もなお完全な正しさを失っていない。個々の点はところどころなおさなくてはならないだろう。これらの原則を実際にどう適用するかは、『宣言』がみずから言明しているように、どこでも、またいつでも、歴史的にあたえられた事情にかかるものである。だから、第二章の終りで提案されている革命的諸方策には、決して特別な重みはおかれていない。今日ならば、この章句は多くの点でちがつたいい方をすべきであろう。最近二十五年間における大工業のはかり知れなり進歩や、それとともに前進する労働者階級の党组织や、二月革命をはじめとしさらに進んでプロレタリア階級がはじめて二か月のあいだ政権をにぎつたパリ・コンミューーンの実践的諸経験を考えれば、この綱領は今日ではところどころ時代おくれとなつている。特にコンミューーンは、「労働者階級は、既成の国家機関をそのまま奪いとつて、それを自分自身の目的のために動かすことはできない」という証明を提供した。(『フランスにおける内乱、国際労働者協会総務委員会の建言』^{アドレッセ}を見よ。ドイツ語版一九ページ。岩波文庫版九〇ページ。ここにこの点のくわしい説明がある。)さらに、社会主義諸文献の批判は、一八四七年までしかないのであるから、今日ではそれが不充分であることはいうまでもない。同様に、種々の反対党に対する共産主義者の立場に関する記述(第四

章)もまた、基本的な点では今日でもなお正しいが、こまかい点では今日ではすでに時代おくれとなつてゐる。というのは、政治情勢は全然ちがつたものとなつたし、歴史の発展によつて、そこにあげられている諸党派の大部分はこの世から消えてしまつたからである。

しかし、この『宣言』は歴史的文書であつて、われわれはもはやそれに変改を加える権利をもつていない。今後版を改めることがあれば、おそらく一八四七年から現在にいたる間の橋わたしをする序文をつけることになろう。この版は、こんなに早く出ると思つていなかつたので、それをする時間がなかつた。

ロンドン、一八七二年六月二十四日

カール・マルクス
フリードリヒ・エンゲルス

一八八三年ドイツ語版への序文

この版の序文には、悲しいことには、私ひとりで署名しなければならない。ヨーロッパやアメリカの全労働者階級が他のだれによりも多くそのおかげをこうむつてゐる人・マルクス——そのマルクスはハイゲートの墓地に眠つてゐる。そしてかれの墓のうえには早くも新草がのび出でてゐる。かれが死んだいまでは、『宣言』の改訂や補足はもはやいつそう問題となりえない。それだけに、ここにもう一度次のことをはつきり確認しておくことはいよいよ必要だと思う。

『宣言』をつらぬいてゐる根本思想は次のことである。おののおのの歴史的時期の経済的生産およびそれから必然的に生れる社会組織は、その時期の政治的ならびに知的歴史にとつて基礎をなす。したがつて（太古の土地共有が解消して以来）全歴史は階級闘争の歴史、すなわち、社会的発展のさまざまの段階における搾取される階級と搾取する階級、支配される階級と支配する階級のあいだの闘争の歴史であつた。しかしいまやこの闘争は、搾取され圧迫される階級（プロレタリア階級）が、かれらを搾取し圧迫する階級（ブルジョア階級）から自分を解放しうるためには、同時に全社会を永久に搾取、圧迫、お

よび階級闘争から解放しなければならないという段階にまで達した。——この根本思想はただマルクスだけに属するものである。^(二)

私はこのことをすでにしばしば明言した。だがいまこそ、このことを『宣言』自身の序文としても書いておくことが必要である。

ロンドン、一八八三年六月二十八日

F・エンゲルス

(一) [原註] (一八九〇年ドイツ語版へのエンゲルスの註) 私は英訳への序文でこうのべている。「私の考えによれば、この思想は、ダーウィンの学説が自然科学の進歩の基礎となつたと同様に、歴史科学の進歩の基礎となる使命をもつものである。——そしてわれわれふたりは、この思想にすでに一八四五年の数年前からだんだん近づいていた。私が独力でどの程度この方向に進んでいたかは、私の『イギリスにおける労働階級の状態』が示している。しかし一八四五年の春、私がブリュッセルでマルクスに再会したとき、かれはこの思想を仕上げていて、それを、私が右に要約したのとほとんど同じようにはつきりした言葉で私にのべた。」

一八九〇年ドイツ語版への序文

前の序文を書いてのち、『宣言』のあたらしいドイツ語版がまたも必要となつた。また『宣言』についてもいろいろなことが起つた。ここでそれについてのべねばならない。第二のロシア語訳——ヴエラ・ザスリツチによる——は一八八二年ジュネーヴで出版され、その序文は、マルクスと私とで書いた。残念なことにそのドイツ語原文を私は紛失してしまつた。だから、まったくむだな骨折りであるが、私はロシア語から逆に翻訳しなおさなければならぬ。それは次のようなものである。^(二)

(一) 〔訳註〕 この失われたドイツ語原文は、のちに発見されて、モスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所に保存されている。以下の訳文は、そのドイツ語原文によつたものである。エルンゲルスの復元訳と表現のちがつてある主要なところを「」によつて示す。

『共産党宣言』の最初のロシア語版は、バクーininの翻訳で、六〇年代のはじめ、『コロコル』(Kolokol)の印刷所で出版された。そのころ西ヨーロッパ人は、この本(『宣言』のロシア語版)を、せいぜいのところめずらしい文献としか見ることができなかつた。今日ではこういう考え方是不可能であろう。

当時（一八四七年十二月）〔宣言〕がはじめて出版された当時（一八四八年一月）〕プロレタリア運動〔プロレタリア運動の普及領域〕がまだどんなにせまい領域〔範囲〕しか占めていなかつたかは、『宣言』の最後の章、種々の国における「種々の反対党に対する共産主義者の立場」がもつともはつきり示している。すなわち、ここには何よりも——ロシアと合衆国が欠けていた。そのころは、ロシアがヨーロッパの全反動の〔ヨーロッパの反動〕最後の大予備軍をなしていた時代であり、合衆国が移民によつてヨーロッパにおけるプロレタリアの過剰力を吸収していた〔合衆国への移民がヨーロッパ・プロレタリア階級の過剰力を吸収していた〕時代であつた。この二つの国は、ヨーロッパに粗生産物〔原料〕を供給すると同時にヨーロッパの工業生産物の販売市場であつた〔販売の市場として役立つた〕。したがつて当時、両国は、いろいろのやり方で、ヨーロッパの現存秩序をささえる柱であつた〔ヨーロッパの社会秩序をささえる柱としてあらわれていた〕。

今日ではなんという変りようだ！　まさにこのヨーロッパからの移民が北アメリカの巨大な農業生産を可能にし〔北アメリカ農業のおどろくべき発展を可能にし〕、その競争力はヨーロッパの——大小の——土地所有をその土台からゆり動かしているのだ。そのうえこの移民によつて合衆国は、これまでの西ヨーロッパの、特にイギリスの工業的独占を短期間に打ちやぶらずにはいないほどのエネルギーと規模とをもつて、そのおどろくべ

き工業資源を利用することができた〔利用する可能性をあたえられた〕のだ。この二つの事情は、アメリカ自身に対しても革命的に〔革命的な方向において〕反作用する。「アメリカの」全政治制度〔秩序〕の基礎である自作農（ファーマー）の中小土地所有は、次第に巨大農場との競争に敗れ、同時に、工業地帯にははじめて大量のプロレタリア階級と、おとぎばなしのような資本の集積とが発展する。

ではロシアはどうだろう！ 一八四八—四九年の革命のあいだは、ヨーロッパの君主たちばかりでなく、ヨーロッパのブルジョアもまた、ロシアの干渉を、ちょうどめざめはじめた〔自分の力を知りつつあつた〕プロレタリア階級に対する唯一の救いと見たのであつた。ツァーはヨーロッパ反動の元首であると布告された。今日ではツァーは革命の捕虜としてガッチナにあり、ロシアはヨーロッパの革命行動〔運動〕の前衛となつている。

『共産党宣言』の課題は、近代のブルジョア的所有の崩壊〔没落〕が不可避的に迫りつつあることを布告することであった。しかしロシアでは、資本主義〔的体制〕のべてんが急速に栄え、ブルジョア的土地所有がいまようやく発達しつつあるが、またそれと並んで、土地の過半は農民の共有となつていて。そこで次のことが問題となる。ひどく分解してはいるが太古からの土地所有の一形態〔原生的共有の形態〕であるロシアの農民共同体（オーブンチナ）は、共産主義的共有のより高い形態〔土地所有のより高い共産主義的形態〕に直接に移行しう

るであろうか？ それとも反対に、そのまえにそれは西ヨーロッパの歴史的発展においておこなわれたと同じ崩壊過程を通過しなければならないであろうか？

この問題に対しても今日可能な唯一の解答は、次の如くであろう。もしロシア革命が西ヨーロッパにおけるプロレタリア革命への合図となり、その結果両者がたがいに補いあうならば、現在のロシアの土地共有制は、共産主義的発展の出発点として役立つことができる。

ロンドン、一八八二年一月二十一日

カール・マルクス
フリードリヒ・エンゲルス

あたらしいポーランド語訳 Manifest komunistyczny が、同じじろにジュネーヴで出版された。

やうにあたらしくマーケ語訳が『社会民主主義文庫』(Socialdemokratisk Bibliotek, Kjöbenhavn 1885.)として出版された。これは、遺憾ながら、まったく完全とはいえない。一一三の重要な個所が、翻訳者にわかりにくかつたらしく、省略されている。

そのほかにもいろいろ軽率の痕跡が認められる。しゃべりの痕跡は、翻訳者がもう少し綿密にやれば立派なものを作りえたであろうとこういとがいの仕事のうえにうかがわれるだけに、ますます不愉快な感じをあたえる。

一八八六年にあたらしいフランス語訳が、パリの『社会主義者』(Le Socialiste)にのった。これは今までに出たものもすぐれたフランス語訳である。

そのあとで同じ年にスペイン語訳が、最初マドリッドの『社会主義者』(El Socialista)に発表され、それから小冊子として発行された。すなわち、Manifesto del Partido Comunista por Carlos Marx y F. Engels, Madrid, Administración de „El Socialista“, Hernán Cortés 8. にある。

またこんなおもしろい話があるからのべておいた。一八八七年にアルメリア語訳の原稿がコンスタンティノープルのある出版屋にもちこまれた。ところがその善良な出版屋は、マルクスの名前がつけられているようなものを印刷する勇気をもたず、むしろ翻訳者自身が著者と名乗つてはどうかといった。だが翻訳者はそれをいとわかつといつてである。

多少とも不正確なところのあるいろいろのアメリカ訳が幾度もイギリスで再刻されたのち、ついに一八八八年に信頼できる翻訳が出た。それは私の友人のサミュエル・ムー

アのゆのや、出版のまゝにゆへ一度われわれぶたりやこへしゅじ日を通したゆのやある。その表題は、Manifesto of the Communist Party, by Karl Marx and Frederick Engels. Authorized English Translation, edited and annotated by Frederick Engels, 1888. London, William Reeves, 185 Fleet St., E. C. ノの版の註のうちから111を、私は本版にも採用した。

ノの『宣言』には独自の経歴がある。それが出版された瞬間には、そのころまだ多数でなかつた科学的社会主义の前衛から、熱狂的な歓迎をうけた(第一の序文にあげた諸翻訳が証明するように)のであつたが、一八四八年六月のパリの労働者の敗北をもつてはじまる反動によつて、たちまち背後におしごめられ、ついには一八五二年十一月のケルンの共産主義者に対する有罪宣告によつて、「法律上」追放を宣告された。二月革命の日からはじまつた労働運動がおおやけの舞台から姿を消すとともに、『宣言』もまた背後へしりぞいたのであつた。

ヨーロッパの労働者階級が、ふたたび、支配階級の権力に向つてあらたに充分スター
トがされるほど強力になつたときに、**国際労働者協会**^{イノテルナチオナーレ・アルバイターアソシエーション}が生れた。この協会は、ヨーロッパとアメリカの戦闘的な全労働者層を結びあわせて、一つの大軍團を作ることを目的としていた。したがつて協会は、『宣言』のなかに書かれている諸原則にもとづい

て、発足することはできなかつた。協会は、イギリスの労働組合トーレード・ユニオンに対しても、フランス、ベルギー、イタリー、およびスペインのブルードン主義者に対しても、ドイツのラツサル派(ラツサル)に対しても門戸を閉じないような綱領をもたねばならなかつた。この綱領——インタナショナルの規約の基本原則——は、マルクスによつて、バクーニンや無政府主義者たちさえほめたほどの巧みさをもつて起草された。『宣言』にかかげられた諸命題の究極の勝利については、マルクスはひたすら労働者階級の知的發展に信頼し、その知的發展は、共同一致の行動と討論から必然的に生れると信じた。資本との闘いのなかで生ずるいろいろの出来事や変転によつて、成功、そしてそれ以上に敗北によつて、闘う人々はそれまでの万能薬がどんなに不充分であるかを知り、そしてその頭脳は、労働者解放の眞の条件は何であるかについての根本的な洞察をいつそう受けいれやすくなるにちがいない、とマルクスは考えた。そしてマルクスは正しかつた。インタナショナルが解散された一八七四年の労働者階級は、それが創設された一八六四年の労働者階級とはまつたくちがつてゐた。ラテン諸国におけるブルードン主義、ドイツにおける特殊なラツサル主義は死に瀕ひんしていた。きわめて保守的であつた当時のイギリスの労働組合トーレード・ユニオンさえ、次第に一八八七年スワンシーでその大会の議長が、組合の名において、「大陸の社会主義はわれわれにとつて恐ろしさを失つた」とのべる時点に近づいていた。ところがその

大陸の社会主義なるものは、すでに一八八七年には、ほとんどまつたく『宣言』にのべられている理論にほかならなかつたのである。このように『宣言』の歴史は、ある程度まで、一八四八年以後の近代労働者運動の歴史を反映している。現在では『宣言』は、疑いもなく、社会主義文書のすべてのうちでもつとも広く普及し、もつとも国際的な著作であり、シベリアからカリフォルニアにいたるあらゆる国々の幾百万労働者にとつての共通の綱領である。

(一) [原註] ラッサルは個人的にはわれわれに対して、つねにマルクスの「弟子」と自認していた。そしてそういう人としては当然『宣言』の土台のうえに立つっていた。ラッサルの信奉者たちのなかには、国家信用にもとづく生産協同組合を作れというラッサルの要求を越えず、全労働者階級を国庫扶助者と自己扶助者とに分類した人々があるが、もちろんこれは別である。

しかも、この『宣言』がでたときには、われわれはそれを社会主義宣言と呼ぶわけにはいかなかつた。一八四七年には、社会主義者というとき、そのなかに一種類の人々が含まれていた。一つは、さまざまの空想的体系の信奉者、特にイギリスのオーウェン主義者とフランスのフーリエ主義者であり、これは両者とも当時すでに萎縮してしまつて、次第に死滅していく単なる宗派となつていて。もう一つは、さまざまの万能薬をのませ膏藥こうやくをべたべたはつて、資本や利潤を少しも痛めずに社会の弊害を取り除こうとする

種々雑多な社会的やぶ医者であつた。両方とも、労働運動の外部に立ち、はるかに多くの支持を「教養ある」階級に求める人々であった。これに対して、労働者のうちで、單なる政変では充分でないと確信し、社会の根本的改造を要求する部分、その部分の人々は当时みずから共産主義的と称した。それは単に荒けずりの、単に本能的な、時にはいくらか粗野な共産主義であつた。それでも、この共産主義は、空想的共産主義の二つの体系、すなわちフランスではカバーの『イカリア』の共産主義、ドイツではヴァイトリングの共産主義を作りだすだけの強さをもつていた。一八四七年には、社会主义はブルジョアの運動を意味し、共産主義は労働者の運動を意味した。社会主义は、少くとも大陸では、サロンに出入りできるものであり、共産主義はその正反対のものであつた。そしてわれわれはすでにそのころ、決然と「労働者の解放は労働者階級自身の仕事であらねばならない」という意見をもつていたのであるから、われわれは、二つの名前のいずれを選ぶかについて一瞬も迷うことはなかつた。それ以後も、この名前を返上しようなどと思つたことはない。

「万国のプロレタリア団結せよ！」いまでは四十二年前になるが、プロレタリア階級が自己の要求をかかげてあらわれた最初のパリ革命の前夜に、われわれがこの言葉を世界へ向つて叫んだときに、これに答える声はほんのわずかしかなかつた。だが一八六四

年九月二十八日には、西ヨーロッパのたいがいの国のプロレタリアは団結して、思い出にかがやく国際労働者協会を組織した。このインタナシヨナル自身はたしかに九年しか生きなかつた。だが、これによつて創始された万国のプロレタリアの永遠の盟約は、いまも生きており、まえよりもっと力強く生きている。このことに対するは、まさに今日という日以上によい証人はない。というのは、私がこの文を書いている今日、ヨーロッパとアメリカのプロレタリア階級は、一つの軍隊として、一つの旗のもとに、一つの当面の目標、すなわちすでに一八六六年のインターナショナル・ジュネーヴ大会によつて、さらにふたたび一八八九年のパリ労働者大会で宣言された八時間標準労働日の法的確立という目標のために、そのはじめて動員された戦力の閱兵をおこなうのである。そして今日の光景を見て、あらゆる国の資本家や地主どもは万国のプロレタリアが今日実際に団結していることについて、眼をひらくであろう。

ああ、マルクスが私と並んで立つことができ、これを自分の眼で見ることができたら！

ロンドン、一八九〇年五月一日

F・エンゲルス

一八八八年英語版への序文

『宣言』は、「共産主義者同盟」の政綱として出版された。この同盟は労働者の団体であり、はじめはもっぱらドイツ人のものであつたが、のちに国際的な団体となつた。そして一八四八年以前におけるヨーロッパ大陸の政治情勢のもとでは、この団体が秘密結社であつたことはやむをえない。一八四七年十一月ロンドンでひらかれた同盟の大会で、マルクスとエンゲルスは、理論的にして実践的な、完全な党綱領の発表を準備することを委任された。この草案は、一八四八年一月、ドイツ語で起草され、二月二十四日のフランス革命の数週間まえ、印刷のためにロンドンへ送られた。フランス語訳は、一八四八年の六月叛乱の直前、パリで出版された。最初の英語訳は、ヘレン・マクファーレン娘によつてなされ、一八五〇年、ジョージ・ジュリアン・ハーネイの編集するロンドンの『赤色共和主義者』(Red Republican)にのつた。デンマーク語版およびポーランド語版もまた出版されてゐる。

一八四八年のパリ六月叛乱——プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのこの最初の大戦闘——の敗北は、ヨーロッパ労働者階級の社会的、政治的活動を、しばらく

のあいだ、ふたたび背後におしゃつた。それ以来支配権をめぐる闘争は、二月革命以前と同じように、また、有産階級のさまざまの分派のあいだでのみ戦われることになった。労働者階級は、政治的な行動の自由を獲得するための戦いと、中産階級急進派の最左翼という位置にかぎられてしまつた。独立のプロレタリア運動が生きているという徵候がみとめられると、その運動は情けようしやなくつぶされた。こうしてトイセンの警察は、当時ケルンにあつた「共産主義者同盟」の中央委員会をさがしだした。委員たちは逮捕され、十八か月の拘禁ののち、一八五二年十月に公判にふされた。この有名な「ケルン共産党裁判」は、十月四日から十一月十二日までつづき、被告人のうち七名は、三年ないし六年の要塞禁錮刑をいい渡された。この判決の直後、「同盟」は、まだ残つていた委員たちによつて正式に解散された。『宣言』はといえば、それ以来忘れられる運命にあるように見えた。

ヨーロッパの労働者階級が、ふたたび支配階級に攻撃を加えるだけの力を取りもどしたときに、「国際労働者協会」ができあがつた。しかしこの協会は、ヨーロッパとアメリカの全戦闘的プロレタリア階級を一団に結びあわせるという明確な目的をもつて作られたものであつて、ただちに、『宣言』に收められている諸原則を布告することはできなかつた。インターナショナルは、イギリスの労働組合トレイド・ユニオンにも、フランス、ベルギー、イ

タリーおよびスペインのブルードン信奉者たちにも、ドイツのラツサル派^(二)にも受けられたるだけの幅をもつた綱領をもたねばならなかつた。マルクスは、この綱領をすべての党派に満足のいくように作成したのであつたが、かれは全幅の信頼を労働者階級の知的成長におき、それが共同一致の行動と相互の討論から必然的に生れると信じた。資本との闘いのなかで生ずるいろいろの出来事や変転は、その勝利は、そしてそれ以上にその敗北は、各派のかかげるさまざまのいかさま療法がどんなに不充分であるか人々に意識させ、労働者階級を解放するための眞の前提是何かをもつと完全に見抜く道をひらかずにはいられない、とマルクスは考えた。そしてマルクスは正しかつた。インタナシヨナルが一八七四年に解散したとき、わかれていつた労働者たちは、一八六四年に創設されたときの労働者たちとはまったくちがつていた。フランスのブルードン主義、ドイツのラツサル主義は死に瀕^(ひん)していた。保守的なイギリスの労働組合^{トレイド・ユニオン}でさえ、その多数はすでにずっとまえからインタナシヨナルと関係を断つてはいたが、しだいに、昨年スワンシー大会の議長が組合の名において「大陸の社会主義はわれわれにとつて恐ろしさを失つた」とのべることのできた時点にまで近づきつつあつた。実際、『宣言』の諸原則は、あらゆる国の労働者のなかにいちじるしく進出して來るのである。

(一) [原註] ラツサルは個人的にはわれわれに対して、つねにマルクスの弟子と自認していた。

そしてそういう人としては、『宣言』の土台のうえに立っていた。ところが一八六〇—六四年のおおやけの煽動においては、国家信用によつてつく生産協同組合を作れという要求を越えていなかつた。

こうして『宣言』そのものが、ふたたび前面にあらわれてきた。ドイツ語原文は、一八五〇年以来、スイス、イギリス、アメリカでいくども再刻された。一八七一年には英語に、しかもニューヨークで翻訳され、その『ウッドハル・アンド・クラフリンス・ウイークリー』(Woodhull and Claflin's Weekly)にのつた。この英語訳にもとづいて、ニューヨークの『社会主義者』(Le Socialiste)にフランス語訳もあらわれた。その後少くとも一つの英語訳が、多かれ少かれゆがめられて、アメリカで出版され、その一つはイギリスで再刻された。バクーニンによつてなされた最初のロシア語訳は、一八六三年ごろジュネーヴで、ゲルツエン(ヘルツエン)の『コロコル』(Kolokol)発行所から出版され、女傑ヴァエラ・ザスリッチによる第二訳もまたジュネーヴで、一八八二年に出版された。あたらしいデンマーク語版は『社会民主主義文庫』(Socialdemokratisk Bibliothek)として一八八五年コペンハーゲンで発行され、あたらしくフランス語訳は、一八八六年、パリの『社会主義者』(Le Socialiste)にのつた。後者からスペイン語訳が作られ、一八八六年、マドリッドで出版された。ドイツ語の再刻はかぞえきれないぐらいで、少くとも全部で

十二種類はある。数か月まえコンスタンティノープルで出版されるはずであつたアルメニア語訳は、ついに日の目を見なかつた。きくところによると、出版屋がマルクスの名前のついた本を出版する勇気をもたず、訳者自身の著書ということにしようとして訳者からことわられたからである。そのほかに、これ以外の国語への翻訳について耳にはしたが、私はまだ見ていない。このように『宣言』の歴史は、高度に、近代の労働者運動の歴史を反映している。現在『宣言』は、疑いなく、あらゆる社会主義文献のうちでもつとも広く普及した、もつとも国際的な著作であり、シベリアからカリフォルニアにいたる幾百万の労働者によつて認められる共通の綱領である。

しかもこれが書かれたときには、われわれはこれを『社会主義宣言』と呼ぶわけにはいかなかつた。一八四七年に社会主義者といえば、一方ではさまざまの空想的体系の信奉者、すなわち、すでにともに萎縮してしまつて单なる宗派セクトとなり、次第に死滅しつつあつたイギリスのオーウエン主義者やフランスのフーリエ主義者を意味し、他方では、膏薬こうやくをべたべたはつて、資本にも利潤にも危害を加えずに、あらゆる種類の社会の弊害をとり除くことを約束する種々雑多な社会的やぶ医者を意味した。両方とも労働者運動の外部に立ち、むしろ支持を「教養ある」階級に求める人々であつた。労働者階級のうちで單なる政変では充分でないと確信し、社会の全面的改造の必要を要求した部分、こ

の部分はみずから共産主義者と称した。それは粗野な、荒けずりの、純粹に本能的な共産主義であった。それでもそれは、基本的な点にはふれていて、労働者階級のなかに空想的共産主義を、フランスではカベー、ドイツではヴァイトリングの共産主義を作りだすだけの強さをもつていた。このように一八四七年には、社会主義は中産階級の運動であり、共産主義は労働者階級の運動であった。社会主義は、少くとも大陸では、「サンに出入りできるもの」であり、共産主義はその正反対であった。そしてわれわれはじめから「労働者階級の解放は労働者自身の仕事であらねばならない」という意見であったから、二つの名前のいずれを選ばねばならないかについては、疑いはありえなかつた。またそれ以後もわれわれは、この名前を捨てようなどと思ったことはない。

『宣言』はわれわれの共同の著作であるが、私は、その核心をなす基本思想はマルクスのものであることをのべる義務があると思う。その思想とは次の主張である。いかなる歴史的時期においても、経済的生産と交換の支配的な様式、およびそれから必然的に生れる社会組織が土台をなし、その時期の政治的なならびに知的歴史はこの土台のうえに築かれ、この土台からのみ説明される。したがって、人類の全歴史は（土地を共有していた原始氏族社会が崩壊して以来）階級闘争の歴史であった。つまり、搾取する階級と搾取される階級、支配する階級と圧迫される階級とのあいだの闘争の歴史であった。そ

してこの階級闘争の歴史は、次第に発展し、現在では、搾取され、圧迫される階級——プロレタリア階級——が、搾取し支配する階級——ブルジョア階級——のくびきから解放されるためには、同時に、また究極的に、社会全体をあらゆる搾取、あらゆる圧迫、あらゆる階級的差別、あらゆる階級闘争から解放しなければならない段階に達している。この思想は、私の考えによれば、ダーウィンの学説が自然科学の進歩の基礎となつたと同様に、歴史科学の基礎となる使命をもつものであるが、この思想にわれわれはふたりとも、一八四五年の数年前からだんだん近づいていた。私が獨力でどの程度この方向に進んでいたかは、私の『イギリスにおける労働階級の状態』⁽¹⁾がもつともよく示している。だが一八四五年の春、私がブリュッセルでマルクスに再会したとき、かれはこの思想を仕上げていて、それを、私が右に要約したのとほとんど同じようにはつきりした言葉で私にのべた。

(1) [原註] フリードリヒ・エンゲルス『一八四四年のイギリスにおける労働階級の状態』フローレンス・K・ヴィシェヌエツキ訳。——ロンダン、スワン、ゾンネンシャイン社(ドイツ語にはニョーベーク、ラヴエル——ロハム、W・リーデズ、一八八八年となってゐる)。

The Condition of the Working Class in England in 1844. By Frederick Engels. Translated by Florence K. Wischnewetzky——London, Swan, Sonnenschein & Co. (ハスクワ版『宣証』)には

New York, Lovell——London, W. Reeves, 1888. となつてゐる。——訳者

(11)

一八七二年のドイツ語版につけたわれわれの共同の序文から、次の二節を引用しよう。

(三) [訳註] 次の引用はドイツ語から訳出したものである。

「最近二十五年間に事情はおおいに変化したが、それでもこの『宣言』のなかにのべられてゐる一般的諸原則は、だいたいにおいて、今日もなお完全な正しさを失っていない。個々の点はところどころなおさなくてはならないだろう。これらの原則を実際にどう適用するかは、『宣言』がみずから言明しているように、どこでも、またいつでも、歴史的にあたえられた事情にかかるものである。だから、第二章の終りで提案される革命的諸方策には、決して特別な重みはおかれていない。今日ならば、この章句は多くの点でちがつたといふ方をすべきであろう。最近二十五年間における大工業のはかり知れない進歩や、それとともに前進する労働者階級の党组织や、二月革命をはじめとしさらに進んでプロレタリア階級がはじめて二か月のあいだ政権をにぎつたパリ・コンミューンの実践的諸経験を考えれば、この綱領は今日ではところどころ時代おくれとなつてゐる。特にコンミューーンは、『労働者階級は、既成の国家機関をそのまま奪いとつて、それを自分自身の目的のために動かすことはできない』という証明を提供した。(『フランスにおける内乱、国際労働者協會総務委員会の建言』、シカゴ、チャールズ・H・カ

一社発行、を見よ。ここにこの点のくわしい説明がある。)さらに、社会主義諸文献の批判は、一八四七年までしかないのであるから、今日ではそれが不充分であることはいうまでもない。同様に、種々の反対党に対する共産主義者の立場に関する記述(第四章)もまた、基本的な点では今日でもなお正しいが、そのこまかい点では今日ではすでに、時代おくれとなっている。というのは、政治情勢は全然ちがつたものとなつたし、歴史の発展によつて、そこにあげられている諸党派の大部分はこの世から消えてしまつたからである。

しかし、この『宣言』は歴史的文書であつて、われわれはもはやそれに変改を加える権利をもつていらない。』

本訳書は、マルクス『資本論』の大部分の訳者であるサミュエル・ムーア氏によつてなされたものである。われわれはいっしょに眼をとおし、私は、歴史的な事柄を説明するための一、二の脚註を加えた。

ロンドン、一八八八年一月三十日

フリードリヒ・エンゲルス

一八九二年ポーランド語版への序文

『共産党宣言』のあたらしいポーランド語版が必要になつたという事実から、いろいろ考えさせられることがある。

まず第一に注意すべきことは、『宣言』がこのごろ、ヨーロッパ大陸の大工業の発展に対するいわば一つの分度器となつていることである。ある国の大工業がのびる程度に応じて、その国の労働者のあいだに、所有階級に対する労働者階級としての自分の地位をはつきりさせたいという欲求が成長し、かれらのあいだに社会主義運動がひろがり、そして『宣言』への需要が増加する。だから、各国の労働者運動の状態ばかりでなく、大工業の発達程度もまた、その国語で普及される『宣言』の部数によつて、かなり正確に測ることができる。

のことから見ると、あたらしいポーランド語版は、ポーランド工業の決定的な進歩をあらわしている。十年前に出版された最後の版以来、この進歩が実際に起つたということについては、疑問はありえない。ロシア領ポーランド、すなわちコングレス・ポーランド〔一八一五年のウイーン会議によつてロシア領となつた地方——訳者〕は、ロシア帝国の

大工業地区となつた。ロシアの大工業がまばらに散在している——フィンランド湾に一区、中央部(モスクワ県とウラジミール県)に一区、黒海およびアゾフ海岸に第三の区、その他に分散している——のに対して、ポーランド大工業は、比較的小さな地域に集まつていて、この集中から利益と不利益が起つてゐる。この利益を認めたのは競争相手のロシアの製造業者であつて、かれらはポーランド人のロシア化をあれほど熱心に希望したにもかかわらず、ポーランド人に對する保護関税を要求した。不利益——ポーランドの製造業者およびロシア政府にとつての——は、ポーランドの労働者間における社会主義思想の急速な普及、および『宣言』への需要の増大のなかにあらわれてゐる。

しかし、ロシア工業を追い越したポーランド工業の急速な発達は、それとして、ポーランド民族のたくましい生命力に対するあたらしい証拠であり、きたるべき民族的再興のあたらしい保証である。しかし、独立した強力なポーランドの再興は、ポーランド人にはばかりでなく、われわれすべてに關係する事柄である。ヨーロッパ諸国民のほんとうの國際的協力は、これら諸国民のおのがそれ自身の国で完全に自律的である場合のみ可能である。一八四八年の革命は、プロレタリアの旗のもとに、プロレタリアの戦士をして結局はブルジョア階級の仕事をなさしめたにすぎなかつたとはいえ、他方ではまた革命の遺言執行人であるルイ・ボナパルトとビスマルクを通して、イタリー、ドイ

ツ、ハンガリーの独立を実現させた。ところが、ポーランドは、一七九二年以来これら三国を合せたより以上に革命のためにつくしたのに、一八六三年、十倍も優勢なロシアと戦つて敗れたとき、打ち捨てられてしまった。貴族はポーランドの独立を、維持することも、ふたたび闘い取ることもできなかつた。ブルジョア階級はこの独立問題に対し、現在は少くとも無関心である。しかもポーランドの独立は、ヨーロッパ諸国民の調和ある協力にとつて一つの必要である。それは、若いポーランド・プロレタリア階級によつてのみ闘い取られるものであり、かれらの手にはいつたときにはのみ手厚い保護をうけるものである。というのは、そのほかの全ヨーロッパの労働者は、ポーランドの独立を、ポーランドの労働者自身と同じように必要としているからである。

ロンドン、一八九二年二月十日

F・エンゲルス

一八九三年イタリー語版への序文

『共産党宣言』の出版は、一八四八年三月十八日、すなわちミラノとベルリンの革命とちょうど同じ日にあたるということができる。この革命は、中心部——一つはヨーロッパ大陸の、他方は地中海の——にある二つの国民の、すなわちそのころまで国内分裂と内部的争闘とによつて弱められ、そのために外国の支配下におちいつていた二つの国民の叛乱であつた。イタリーがオーストリア皇帝に屈服していたのに対し、ドイツは、それほど直接的ではなかつたが、劣らず苦しいロシア皇帝の圧制に耐えねばならなかつた。一八四八年三月十八日の成果は、イタリーとドイツをこの恥辱から解放した。二つの大国民が一八四八年から一八七一年にいたるあいだに、再建され、いわば自分自身に返還されたとすれば、それは、マルクスがいつたように、一八四八年の革命を鎮圧したその同じ人々が、あとでは自分の意志に反して革命の遺言執行人となつたからである。

この革命は、どこでも、労働者階級の仕事であつた。バリケードを築いたのも、生命を賭したのも労働者階級であつた。だが、かれらが政府を打ち倒したとき、ブルジョア

階級の支配を打ち倒そうという明白な意図をもつていたのは、パリの労働者だけであった。しかし、かれらが自分自身の階級とブルジョア階級とのあいだにある避けがたい対立をどんなに充分に意識していたとしても、国内の経済的進歩も、フランス労働大衆の精神的発展も、社会の変革を可能にする程度にはまだ達していなかつた。だから、革命のみのりは、結局、資本家階級の手におさめられてしまつた。他の諸国、すなわちイタリー、ドイツ、オーストリアでは、労働者は結局において、ブルジョア階級の手に権力をぎらせること以外には何もしなかつた。だが、どんな国でも、ブルジョア階級の支配は、国民的独立なしには不可能である。だから一八四八年の革命は、それまでそれもたなかつた諸国民、すなわちイタリー、ドイツ、ハンガリーの統一と独立を招きよせねばならなかつたのである。ポーランドもいづれこれにつづくであろう。

つまり一八四八年の革命は、社会主義革命ではなかつたが、やはり社会主義革命への道をならし、そのための土台を準備した。ブルジョア支配は、すべての国において大工業を昂揚させるとともに、最近四十五年間に、いたるところに無数の、かたく結合された、そして強力なプロレタリア階級を作りだした。こうしてブルジョア支配は、『宣言』の言葉を用いれば、自分自身の墓掘人を生みだしたのである。もし各国民の独立と統一とが再建されなかつたならば、共通の目標に達するためのプロレタリア階級の国際的團

結も、これらの国民の冷静な、賢明な協力も、実現されえなかつたであろう。一八四八年以前の時代の政治的諸関係のもとで、イタリー、ハンガリー、ドイツ、ポーランド、ロシアの労働者の共同の国際的な活動があつたかどうかを頭に浮べて見るがいい！

このように一八四八年の戦いは、むだではなかつた。あの革命段階からわれわれをへだてる四十五年間も、同様にむだにすぎ去つたのではなかつた。実は熟しつつある。原文の出版が国際的革命にとつてそうであつたように、このイタリー語訳の出版がイタリイ・プロレタリア階級の勝利にとつてよい前兆であるように、というのが私の願いの一切である。

『宣言』は、資本主義が過去に演じた革命的役割をまつたく公正に取りあつかう。最初の資本主義国家はイタリーであつた。封建的中世の終結、近代資本主義時代の出現の姿を示す、ひとりの雄大な人物がいる。それは、中世の最後の詩人であると同時に近代の最初の詩人であるイタリイ人、ダンテである。現在、一三〇〇年ころと同様に、あたらしい歴史時代が生れようとしている。このあたらしいプロレタリア時代の生誕の時を告げるあたらしいダンテを、イタリーはわれわれにおくるであろうか？

ロンドン、一八九三年二月一日

フリードリヒ・エンゲルス

共産党宣言

Manifest der Kommunistischen Partei. Veröffentlicht im Februar 1848. Proletarier aller Länder vereinigt euch. London. Gedruckt in der Office der „Bildungsgesellschaft für Arbeiter“ von J. E. Burghard. 46, Liverpool Street, Bishopsgate.

[8°, 30 Seiten]

ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である。ふるいヨーロッパのすべての強国は、この幽霊を退治しようとして神聖な同盟を結んでいる、法皇とツアード、メツテルニヒとギゾー、フランス急進派とドイツ官憲。

反対党にして、政府党から共産主義だと罵られなかつたものがどこにあるか、反対党にして、自分より進歩的な反対派に対して、また反動的な政敵に対して、共産主義の烙印をおしつけて悪口を投げかえさなかつたものがどこにあるか？

この事実から二つのことが考えられる。

共産主義はすでに、すべてのヨーロッパの強国から一つの力と認められているということ。

共産主義者がその考え方、その目的、その傾向を全世界のまえに公表し、共産主義の幽霊物語に党自身の宣言を対立させるのに、いまがちょうどよい時期であるということ。
この目的のためにさまざまの国籍をもつ共産主義者がロンドンに集まり、次の宣言を起草した。これは、英語、フランス語、ドイツ語、イタリーグ、フランドル語およびデンマーク語で発表される。

第一章 ブルジョアとプロレタリア

今日までのあらゆる社会の歴史^(一)は、階級闘争の歴史である。

(一) [原註] (一八八八年英語版へのエンゲルスの註) ブルジョア階級とは、近代的資本家階級を意味する。すなわち、社会的生産の諸手段の所有者にして賃金労働者の雇傭者である階級である。プロレタリア階級とは、自分自身の生産手段をもたないので、生きるために自分の労働力を売ることをいられる近代賃金労働者の階級を意味する。

(二) [原註] (一八八八年英語版へのエンゲルスの註) すなわち、あらゆる書かれた歴史である。一八四七年には、社会の前史、すなわち記録された歴史に先行する社会組織は、全然といっていいほど知られていなかった。その後、ハクストハウゼンは、ロシアにおける土地の共有制を発見し、マウラーは、土地の共有制がすべてのチューートン部族の歴史的出発の社会的基礎であったことを立証した。そして次第に、村落共同体は、インドからアイルランドにいたるあらゆるところで、社会の原始的形態であること、あるいはあつたことが発見された。そして、氏族^(ゲンス)の真の性質および部族に対するその関係についてのモルガンの称讃すべき発見によつて、原始共産主義社会の内部組織の典型的な形が明らかにされた。この原始時代の共同社会の解体とともに、別々の、ついには対立する階級への分裂がはじまる。私は、この解体過程を、『家族、

私有財産および國家の起源』(第二版、シュトゥットガルト、一八八六年)において追求しようとした。

(一八九〇年ドイツ語版へのエンゲルスの註) すなわち、正確にいえば、文書をもつて伝わってきた歴史である。一八四七年には、社会の前史、すなわちすべての書かれた歴史に先行する社会組織は、まったくわからないといっていいほどであった。その後、ハクストハウゼンは、ロシアにおける土地の共有制を発見し、マウラーは、土地の共有制がすべてのドイツ部族の歴史的出発の社会的基礎であつたことを立証した。そして次第に、共同の土地所有をもつ村落共同体は、インドからイルランドにいたる社会の原型であることが発見された。そしてついに、^{ゲンス}氏族の真の性質および部族内におけるその位置に関するモルガンの称讃すべき発見によつて、この原生的共産主義社会の内部組織の典型的な形が明らかにされた。この本源的な共同体の解体とともに、別々の、ついにはたがいに対立する諸階級への社会の分裂がはじまる。

自由民と奴隸、都市貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方⁽¹⁾と職人、要するに圧制者と被圧制者はつねにたがいに対立して、ときには暗々のうちに、ときには公然と、不斷の闘争をおこなつてきた。この闘争はいつも、全社会の革命的改造をもつて終るか、そうでないときには相鬪う階級の共倒れをもつて終つた。

(二) [原註] (一八八八年英語版へのエンゲルスの註) Guild-master(ギルドの親方)とは、ギルドの正会員、すなわちギルドに属する親方のことであつて、ギルドの長のことではない。

歴史の早い諸時期には、われわれは、ほとんどどこでも社会が種々の身分に、社会的地位のさまざまの段階に、完全にわかっているのを見出す。古ローマにおいては、都市貴族、騎兵、平民、奴隸に、中世においては、封建君主、家臣、ギルド組合員、職人、農奴にわかれていた。なおそのうえ、これらの階級の一つ一つのなかが、たいていまた別々の階層にわかれていた。

封建社会の没落から生れた近代ブルジョア社会は、階級対立を廃止しなかつた。この社会はただ、あたらしい階級を、圧制のあたらしい条件を、闘争のあたらしい形態を、旧いものとおきかえたにすぎない。

しかしわれわれの時代、すなわちブルジョア階級の時代は、階級対立を単純にしたという特徴をもつてゐる。全社会は、敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級——ブルジョア階級とプロレタリア階級に、だんだんとわかっていく。

中世の農奴から、初期の諸都市の城外市民ブアーブルビュルガが生れ、この城外市民層からブルジョア階級の最初の要素が発展した。

アメリカの発見、アフリカの回航は、頭をもたげてきたブルジョア階級にあららしい領域を作りだした。東インドとシナの市場、アメリカへの植民、諸植民地との貿易、交換手段やまた総じて商品の増大は、商業、航海、工業にこれまで知られなかつたような

飛躍をもたらし、それとともに、崩壊していく封建社会内の革命的要素に急激な発展をもたらした。

これまでのようないわゆる封建的もしくはギルド的経営様式は、もはや、あたらしい市場とともに*増大する需要をみたすには足りなかつた。工場手工業マニユーファクトチャがそれに代つた。ギルドの親方は、工業的中産階級によつておしのけられ、異なる組合間の分業は姿を消して、個々の仕事場自身のなかの分業があらわれた。

ところが市場はますます増大し、需要はますます上昇した。マニユーファクトチャ工場手工業をもつてしても、それには応じきれなかつた。このとき蒸気と機械装置とが工業生産を革命した。マニユーファクトチャ工場手工業の代りに近代的大工業があらわれ、工業的中産階級の代りに、工業的百万長者、全工業軍の司令官があらわれた、すなわち近代ブルジョアである。

大工業は、すでにアメリカの発見によつて準備されていた世界市場を作りあげた。世界市場は、商業、航海、陸上交通にはかり知れない発展をもたらした。この発展はまた工業に反作用して、それを大きく伸ばした。そして工業、商業、航海、鉄道が伸びる程度に応じて、ブルジョア階級は発展し、その資本を増加させ、中世から受けついだすべての階級を背後におしやつた。

こうしてわれわれは、近代ブルジョア階級自身が一つの長い発展行程の產物であり、

生産様式や交易様式における一系列の変革の產物であることを知る。

ブルジョア階級のこのような發展の一つ一つの段階にともなつて、それにふさわしい政治的進歩があつた。ブルジョア階級は、封建君主の支配下にあつては圧迫された身分であり、^{コンミューン(四)}自由都市にあつては武装し、自治をもつた組合をなした。そしてあとには、^{マニユファクチャ}独立した都市共和国、まえのばあいは君主政体下の納稅義務をもつ第三身分であつた。次に工場手工業の時代になると、かれらは身分制的王制または絶対的王制において貴族と平衡を保つ錘の役目を果し、大君主制一般の主要な基礎となつた。そしてついには、大工業と世界市場とが建設されて以来、ブルジョア階級は近代的代議制國家において、ひとり占めの政治支配を闘いとつた。近代的國家権力は、単に、全ブルジョア階級の共通の事務をつかさどる委員会にすぎない。

(四)〔原註〕(一八八八年英語版へのエンゲルスの註) フランスでは、初期の都市は、封建領主や親方から地方的自治制と「第三身分」としての政治的權利とを獲得する以前でさえ、「コンミューン」と呼ばれていた。一般的にいえば、ここでは、ブルジョア階級の經濟的發達についてはイギリスが、政治的發達についてはフランスが、典型的な国とされている。

(一八九〇年ドイツ語版へのエンゲルスの註) イタリーとフランスの都市民は、封建領主から最初の自治権を買ひとるかあるいは強奪したのち、自分たちの都市共同体をこう呼んだ。

ブルジョア階級は、歴史において、きわめて革命的な役割を演じた。

ブルジョア階級は、支配をにぎるにいたつたところでは、封建的な、家父長的な、牧歌的ないつさいの関係を破壊した。かれらは、人間を血のつながつたその長上者に結びつけていた色とりどりの封建的きずなをようしやなく切断し、人間と人間とのあいだに、むきだしの利害以外の、つめたい「現金勘定」以外のどんなきずなをも残さなかつた。

かれらは、信心深い陶酔、騎士の感激、町人の哀愁といったきよらかな感情を、氷のようにつめたい利己的な打算の水のなかで溺死させた。かれらは人間の値打ちを交換価値に変えてしまい、お墨つきで許されて立派に自分のものとなつてゐる無数の自由を、ただ一つの、良心をもたない商業の自由と取り代えてしまつた。一言でいえば、かれらは、宗教的な、また政治的な幻影でつつんだ搾取を、あからさまな、恥知らずな、直接的な、ひからびた搾取と取り代えたのであつた。

ブルジョア階級は、これまで尊敬すべきものとされ、信心深いおそれをもつて眺められたすべての職業からその後光をはぎとつた。かれらは医者を、法律家を、僧侶を、詩人を、学者を、自分たちのお雇いの賃金労働者に変えた。

ブルジョア階級は、家族関係からその感動的な感傷のヴェールを取り去つて、それを純粹な金銭関係に変えてしまつた。

ブルジョア階級は、反動家たちがどんなに讃美しようと、中世の殘忍な暴力行使を適当に埋めあわせるものがもつとも怠惰なのらくら生活であつたということを明らかにした。人間がその活動によつて何をなしとげうるかをはじめて証明したのは、かれらであった。かれらは、エジプトのピラミッドやローマの水道やゴチック式の大寺院とは、まつたくちがつた驚異をなしとげた。かれらは、民族移動や十字軍とはまつたくちがつた遠征を実行した。

ブルジョア階級は、生産用具を、したがつて生産関係を、したがつて全社会関係を、絶えず革命していなくては生存しえない。これに反して、古い生産様式を変化させずに保持することが、それ以前のすべての産業階級の第一の生存条件であつた。生産のたえまない変革、あらゆる社会状態のやむことのない動搖、永遠の不安定と運動は、以前のあらゆる時代^{*}とちがうブルジョア時代の特色である。固定した、さびついたすべての關係は、それとともに古くてとうとい、いろいろの觀念や意見とともに解消する。そしてそれらがあらたに形成されても、それらはすべて、それが固まるまえに、古くさくなってしまう。いつさいの身分的なものや常在的なものは、煙のように消え、いつさいの神聖なものはけがされ、人々は、ついには自分の生活上の地位、自分たち相互の關係を、ひややかな眼で見ることを強いられる。

自分の生産物の販路をつねにますます拡大しようという欲望にかりたてられて、ブルジョア階級は全地球をかけまわる。どんなところにも、かれらは巣を作り、どんなところをも開拓し、どんなところとも関係を結ばねばならない。

ブルジョア階級は、世界市場の搾取を通して、あらゆる国々の生産と消費とを世界主義的なものに作りあげた。反動家にとつてはなはだおきの毒であるが、かれらは、産業の足もとから、民族的な土台を切りくずした。遠い昔からの民族的な産業は破壊されてしまい、またなおも毎日破壊されている。これを押しのけるものはあたらしい産業であり、それを採用するかどうかはすべての文明国民の死活問題となる。しかもそれはもはや国内の原料ではなく、もつとも遠く離れた地帯から出る原料にも加工する産業であり、そしてまたその産業の製品は、国内自身において消費されるばかりでなく、同時にあらゆる大陸においても消費されるのである。国内の生産物で満足していた昔の欲望の代りに、あたらしい欲望があらわれる。このあたらしい欲望を満足させるためには、もつとも遠く離れた国や気候の生産物が必要となる。昔は地方的、民族的に自足し、まとまつていたのにに対して、それに代つてあらゆる方面との交易、民族相互のあらゆる面にわたる依存関係があらわれる。物質的生産におけると同じことが、精神的な生産にも起る。個々の国々の精神的な生産物は共有財産となる。民族的一面性や偏狭は、ますます不可

能となり、多数の民族的および地方的文学から、一つの世界文学が形成される。

ブルジョア階級は、すべての生産用具の急速な改良によつて、無制限に容易になつた交通によつて、すべての民族を、どんなに未開な民族をも、文明のなかへ引きいれる。かれらの商品の安い価格は重砲隊であり、これを打ち出せば万里の長城も破壊され、未開人のどんなに頑固な異国人嫌いも降伏をよぎなくされる。かれらはすべての民族をして、もし滅亡したくないならば、ブルジョア階級の生産様式を採用せざるをえなくなる。かれらはすべての民族に、いわゆる文明を自國に輸入することを、すなわちブルジョア階級になることを強制する。一言でいえば、ブルジョア階級は、かれら自身の姿に型どつて世界を創造するのである。

ブルジョア階級は農村を、都市の支配に屈服させた。かれらは巨大な都市を作り出し、農村人口にくらべて都市人口の数を非常に高度に増加させ、こうして人口のいちじるしい部分を農村生活の無知から救い出した。かれらは、農村を都市に依存させたように、未開および半未開諸国を文明諸国に、農耕諸民族をブルジョア諸民族に、東洋を西洋に依存させた。

ブルジョア階級は、生産手段、所有、および人口の分散をだんだんに廃止する。かれらは人口を凝集させ、生産手段を集中させ、財産を少数者の手に集積させた。この必然